

## ブンナベット（飲み屋）の女性たち

—エチオピア社会の一側面—

久田 信一郎

「ブンナベットの女性たち」それは、けっして特別な人たちではない。しいて言えば、飲み屋の女性たちであろう。彼女たちは、いわゆる「娼婦」でもある。それは、彼女たちの職業でもある。それで生計をたてていると言う意味である。エチオピアのブンナベットは、表が飲み屋になっており、その裏にベッドがひとつ置いてあるだけの部屋がいくつかあるのがふつうである。ブンナベットで働く女性は、お客からの注文を聞き飲み物を運び、気に入った客と寝ることもある。

私は、青年海外協力隊員としてエチオピア滞在中、そのブンナベットの二室に二年間住んだ。動機は、職場に近かったからである。ただそれだけである。そこには、女性経営者（アバラシ）と娘が二人、経営者の妹（ベスコット）とその息子が一人いた。ブンナベットには、常に数名の女性たちがいた。食事の世話をする下働きの女性一人と、雑用をする男が一人いた。私が、そこに住み始めたとき（1984年8月）、アバラシの上の娘（イエシマベット）が10歳、下の娘（ヒルツ）が8歳、ベスコットの息子（ファシック）が7歳であった。イエシマベットの父親は、日本人、ヒルツの父親は、ギリシャ系エチオピア人、そしてファシックの父親は、エチオピア人である。アバラシには、当時14歳になる息子（アンマハ）がいた。その子は、エチオピア人の父親と住んでいた。「ブンナベットの女性たち」の子供に父親はいるが、ふつう彼女たちに夫はいない。そこは、「母系社会」

である。一般的にエチオピアでは、「ブンナベットの女性たち」の子供は、父親に認知されている。日本人の父親を持つイエシマベットは、認知されていない。しかし、混血を好むエチオピアで彼女は、誇らしげに大切に育てられている。子供の姓は父親の名を付けるのがふつうである。兄弟姉妹の父親が同じであれば同じ姓をもち、彼らの父親が違えば違う姓をつける。

「ブンナベットの女性たち」の社会的地位はけっして低いわけではない。経済的に自立した女性たち、体ひとつで生計をたてている人たちと言える。綺麗に着飾った彼女たちはじつに魅力的でさえある。ブンナベットの経営者ともなれば、社会的地位、貢献度はさらに上がる。しかし、彼女たちに悩みが無いわけではない。「私たちは、しょせんシャルモータ（娼婦）よ」。その言葉の意を私は、「父系社会」に寄生して生きている「ブンナベットの女性たち」、性的サービスを男性に提供して生計を立てている女性たち、長く続けられる職業ではない、若い時だけの束の間の職業と、理解していた。「ブンナベットの女性たち」は、多くの家族を養っている。田舎の両親、兄弟姉妹、そして彼女らの子供たち。一般的に、母親として彼女らの娘がシャルモータになることを望まない。できることであれば、学校教育を受けて自分と同じ境遇にしたいと思わないのであろうか。反面、彼女たちの息子は、「ブンナベットの女性たち」にはなりえない。職業として成り立たない

ということである。

アバラシも自分の娘をシャルモータには、したくないと常々言っていた。彼女は、娘と甥をミッシェンスクールへ通わせた。母親として、子供らに幸せになってもらいたいと願っていた。学校教育を受けることによって娼婦の娘でも娼婦以外の職業につき、結婚して夫をもち家庭を築くことができることを知っていた。年ごろになった娘たちがブンナベットの生活することが彼女たちのために良くないと考えたアバラシは、娘たちを学校の寄宿舎に入れた。しかし、ヒルツは、学校で二回留年したため15歳のときに退学になった。姉のイエシマベットの17歳のときに、寄宿舎生活が辛いとブンナベットの家へ戻ってしまった。アバラシは、ブンナベットの成功者である。ブンナベットの経営者となった彼女は、社会的地位も確立し子供にも恵まれた。

エチオピアの社会（父系社会）は、「ブンナベットの女性たち」（母系社会）を受け入れている。あるいは、「ブンナベットの女性たち」は、エチオピアの社会と共存していると言えるだろう。貧困と「ブンナベットの女性たち」の間には、相関関係がある。経済的に困窮したときにひとつの選択としてブンナベットで働く方法がある。それには、いくつかの条件がある。彼女たちは、若くて美しくなければならぬ。経済的に体ひとつで自立できるひとつの方法である。しかし、「ブンナベットの女性たち」のすべてが、経済的に自立できるわけではないが、彼女たちに他の選択肢があったとは考えにくい。

「ブンナベットの女性たち」に特別な形容詞をつけているのは誰なのだろうか。イエシマベットの父親（日本人）は、彼女を認知出来なかった。他にも、何人かの日本人とエチオピア人との子供

がいると聞く。日本の慣習上妻以外の女性に生ませた子供、それがエチオピア人との子供であればなおさら認知するのは難しいであろう。しかし、エチオピアの社会で妻以外の女性との間にできた子供を認知するのは当然のことである。そして、この社会は、「ブンナベットの女性たち」と共存してきた。西洋的、または日本的価値観で「ブンナベットの女性たち」のことは見るとき彼女たちは特別な存在と映る。けれども、彼女たちが生きているエチオピアの社会で彼女たちの生き様を見ているとひとつの生き方と思えてくる。このエチオピアは、「ブンナベットの女性たち」の存在を認めている。それに対して、我々他の社会的価値観を持つ者（エチオピアの一部の豊かな者と日本人、西洋人等）は、彼女らの存在を特別のものとして、ただ哀れみをもって認識していないであろうか。アバラシは、年ごろになった娘たちに言う「学校がいやなら街に出て娼婦にでもなってしまうえ」。それが、彼女の本心でないことは確かである。しかし、学校教育を十分に受けなかった、とくに女性の就職の可能性は無いに等しい。そのような彼女等に選択肢があるとすれば、日雇労働者か、ブンナベットであろう。綺麗に着飾って、実入りの良いブンナベットを選択したとしても当然の成り行きのように思える。「ブンナベットの女性たち」をブンナベットから開放するのではなく、我々を性的、人種的偏見、価値観の押しつけから開放したいものである。そして、様々な社会の貧困問題の真の理解と文化的背景の理解が「ブンナベットの女性たち」の、あるいはエチオピア社会の抱えている問題の理解の手助けになるのではないかと考える。

〔ひさだ しんいちろう

青年海外協力隊エチオピア国事務所調整員〕